教科書無償に関する素敵なお話知っていますか？

子どもたちの笑顔　いっぱいの春到来です

寒かった冬が過ぎ、温かい春がやってきました。真新しいランドセルを背負った新1年生、一つ進級した子どもたちの元気な声。新しい教科書を手にした子どもたちがうれしそうな笑顔を見せています。

あなたはこの教科書のことでとっても素敵なお話があるのを知っていますか。

教科書に関する話

それは今からそう遠くない昔のお話。小中学生の教科書は今のようにタダではなく、必要な家庭はお金を出して買いそろえていました。実際、教科書を買っていた方もおられると思います。

当時、教科書を買うことのできる家庭は4月を心待ちにして迎えることができたようですが、買うのに苦労するところや買えないところもたくさんありました。お兄さんやお姉さんからのお下がりだったり、近所の人から譲ってもらったものを修繕しながら使わなければならなかった子どもたちがたくさんいました。

そして、もらった教科書を再び弟や妹たちに譲るために、汚さないように傷まないように大事に大事に使っていました。その裏では、経済的に厳しいくらしの中で新しい教科書を買ってやれない親たちは、毎年3月になるとつらい思いをしていたのでした。

そんな中、高知県で、身のまわりにあるおかしなことや差別をなくそうという運動をしていた母親たちがこのおかしさに気づき、学校教育や教科書について学習を進めていきました。母親たちは、「お金があるかないかで勉強することができるかどうかが決まるのはおかしい。子どもたちはみんな同じように自分の教科書で勉強することができるはず」だと考えました。そして、日本国憲法26条に「義務教育はこれを無償とする」という文を見つけたのです。教科書を買えず、つらい思いをしていたのは、この条文が守られていないからだと気づいたのです。そして、地域の人たちや先生たちと共に運動を広め、「教科書をタダにする会」を結成しました。「教科書を無償に」という憲法を守る運動はさらに広がり、署名もたくさん集まりました。そして町から市、県、全国的な動きになりました。その一方で多くの困難や反対にも出合いましたが、そのようなことを乗り越えながら運動はねばり強く続けられました。そして、ついに一九六九年、全国の全ての小中学校で教科書無償が実現し、すべての子どもたちが安心して義務教育を受けられるようになりました。

新しいインクのにおい、きれいな写真やカラフルな絵でいっぱいの現代の教科書。小中学生の子どもたちが4月に手にする新しい教科書には、こうした子どもたちのことを思う人たちの「教科書無償の闘い」の話があったのです。

小さいけれど熱い思いが集まり、大きな力となったこと。おかしいことはおかしいと真剣に向き合い、声に出していくことの大切さ。現在、小中学校ではこうした話を4月の教科書受け渡しの時や人権学習の時に学んでいます。

子どもたちの笑顔の絶えない町、そして国を作っていきたいものですね。

これからも・・・。

益城町教育委員会

ふるさとの地名漫歩

歴史の変遷と地名 296

平田村は「津森郷平田村…堺村、木櫛村、曲手村、堤村、畔林村、所司官村等小村アリ、里俗ノ説ニ中古土中ヨリ金ノ櫛ヲ掘出セシ金櫛村ト云シヲ今訛テキクツワ村ト称スト云（肥後国誌）」とあり、堺村以外の小村が平田村の上手に集まり、鎮守と思われる白馬社が付近に鎮座するのも、村の発生がこの付近である事を示唆しています。

白馬社創建説話に「津留。祭神、保食神、石祭。欽明天皇二年十一月十一日建立（津森宮社傳）」とあり、祭神（身躰は丸石）が保食神なのは津森宮の末社になる前、平田地域に独立した開拓民がいて保食神はそこの「開拓神」だった事が推定されます。保食神は五穀（稗・麦・粟・大豆・小豆）牛馬、繭を生み出すとされる日本書紀（古事記では大気都比売神）に出る食物の神で、食物不足の開拓地で尊崇されるにふさわしい神です。「神武天皇が十二人の稚児の案内でその村（平田）に行幸され白馬から降りて手綱を繋がれた時、馬の櫛が太陽に光ったので金櫛白馬山と言った（津森宮社傳）」に由来し、創建が三竹の影向石伝承と同じ欽明二年なのも、すでに開発されていた平田地域が十二世紀に津森宮に所領化された事を示唆します。小字の五千塚は「下陳城主光永氏没落の時の戦死者の塚なりと、尚平田より以南古墳散在す総称して之の地名あり（上益城郡誌）」とし、金櫛伝説も五千塚の古墳出土品の伝承が神社創建説話に取り入れられたのでしょう。

平田地域が津森の田原に由来する「おほしさん」に参加するのも、十二世紀のこの白馬社説話が原点だと思われます。

平田（津留）の竹林中に鎮座する白馬社

益城町文化財を訪ねる会
会長　松野國策